

大谷學報 第十七卷 第一號

他力救濟の眞實性に就いて

大須賀 秀道

眞宗で主唱する他力救濟について、その救濟の眞實性がいかに認識せられるであらうか。それは勿論特殊な宗教的體驗に屬するから、その本質が全く吾人の思議を超えた世界におかれるには相違ない。されど祖聖親鸞は、既に教行信證の四法として、他力救濟の眞實を開顯せられた。故に一面にはそれが不可稱不可説不可思議の信海として、絶對超越の世界におかれると同時に、また一面にはそれを教行信證の四法として、吾人の思議の世界に持ち來されたところ、に、『教行信證』に於ける眞宗の開立があるというてよい。随ひて他力救濟の眞實性といふことが、この四法の軌範の下に考察せらるべく吾人の思惟として惠まれる。

而して教行信證の四法孰れも往相廻向の内容として、絶對眞實の開顯に外ならざれど、その中、證の一は未來涅槃の證果として、全く彼岸の世界におかれてゐる。だから吾人の現實に體驗せられる眞實が、教行信の三にあることは言ふまでもない。但し彼岸に於ける涅槃證果が、既に此岸に於ける教行信の背景として、その眞實を裏つけてゐるの

であればこそ、教行信が眞實たり得るのであるけれど、その證果の現實に持ち來されぬ點に於いて、却つて教行信に眞實救濟の意味の存することを忘れてはならない。それゆゑ今は且らく教行信の三を現實に體驗される他力救濟の内容として、そこに開顯されたる眞實性の何であるかを確かめることとする。

然るに教行信の中、教は釋迦の教法にして、これを本願力回向から見れば、寧ろ第十七願の内容として行の中に統攝せられる。故に他力救濟の眞實は、行信二法に於いて主として體驗せられる。これ則ち『行卷』に

謹按^テ往相廻^ル向^ニ有^リ大行^ニ有^リ大信^ニ

と、四法の中から特に行信二法のみを標して往相回向の内容とし、更に偈前に至つて

凡就^{ツテ}誓願^ニ有^リ眞實行信^一

と、誓願について行信の二法に眞實の名を與へた所以であると見なくてはならない。されば行信二法の關係といふことは、主として他力救濟の眞實が、これら二法の上に如何に開顯せられたかといふ見地から考へらるべきであつて、徒に行信論のために行信論を研究するのであつてはならないこと勿論である。

二

然るに行信の義は、必ずしも眞宗特有のものではない。一般佛教にあつても、其解脱の目的を達成するには、概ね行信の二法が必須とせられてゐる。即ち發心修行と言はれ、或は願行又は解行と稱せられ、彼の『起信論』に實踐の部門を修行信心分と呼べるがやうに、その宗教的救濟に行信の二法の要義とせらるゝことは、殆ど大乘佛教の通規であると看做してよい。

加之、人類の精神的救済に、信仰と實踐との相俟つべきことは、嘗に佛教のみの唱道する所にあらず、汎く一般宗教に通ずること、その救済に行信二法の尊重せられることは、決して眞宗のみに限つたことではない。然らば眞宗行信義の特色が何れにあるかといへば、そは言ふまでもなく、一般宗教に於ける行信や佛教諸宗に於ける行信は、相對自力の行信である、ひとり眞宗の主唱する行信は、絶對他力の行信である。縦ひ淨土教の内にありとしても、純粹他力の眞宗を外にしては、未だ相對自力の分域を脱せず、絶對眞實の救済にあらずと看做すところに、眞宗に於ける行信義の特色がある。『教行信證』六卷の批判せるところ、この絶對他力の行信を基調とせる眞實救済の開顯にあることは、今更言ふまでもないことであらう。

されば眞宗學に於ける行信義の研究に對し、第一にその闡明を要求せらるゝは、この行信二法の上に如何に眞實の救済が開顯せられるかといふことでなくてはならない。即ち『教行信證』に於ける『行』『信』二卷の關係といふことも、また七十八願の交渉といふことも、如何に他力救済の上に眞實性が認められるかといふことの外に、宗教に於ける純粹の學として、その研究の意義は失はれる。故に從來學者の研究せる煩瑣にして複雑な行信論を、更にこの眞實救済の開顯といふ見地から再検討するといふことは、それを正しき歸結へと導く方法であらうと信ずる。

三

斯る意圖の下に、行信義を考察せんとするについては、且らく七十八願の關係と行信二法の關係とを切り離して、純ら行信二法の關係についてのみ考察を進めてみたい。固より行は十七願に成就せられ、信は十八願に成就せられたものとすれば、行信の關係は即ち二願の關係であると見るべく、兩者の關係は全然分離せられ得るものでないこ

と勿論ではあるけれど、從來の行信論は此の二の關係を混雜せしめたことが、或はその煩瑣晦澁を來せる所以であつたかも知れない。

されば七十八二願の關係としては、能讚所讚とか能廻向所廻向とか或は能選擇所選擇といふ如き、様々の關係が意味づけられてゐる。これらも悉く他方真宗に於ける眞實救済の内容として、重要な意味をもつものであるには相違ない。それゆゑ二願の關係はその儘に行信の關係であるとも見られることとなるのであつて、既に『六要鈔』(會二七)に、

七十八更不相離^レ行信能所機法一也……七十八兩願俱存所行能信共以周備^{云々}

ともある。故に行信の關係に二願の關係を聯繫せしめることは、無理のないことである。殊に三願轉人を緣由として、二願分開を來せるものと見られるから、二願と二法とは引き離さうとしたとて到底引き離されるものではない。されど今は一應之を區別して、二願の關係は二願の關係として、それに眞實救済が如何に開顯せられるかを考察し、行信は行信として別に行信の内容よりそれが如何に眞實の意義を持つかといふことを検討しやうとするのである。そしてそこに純粹他力の行信が何であるかを突き詰めてみたいのである。前に引ける『六要鈔』に二願不離と行信能所を絡ませてゐるのは、『行卷』に引ける其佛本願力の經文を解説せんが爲めであつた。然るに『教卷』標列の下に、行中攝信の義を釋しては

所以然者行所行法、信是能信、故玄義云言南無者……必得往生已上信行不離機法是一

と、二願に關せず一ら行信二法の上で不離是一の義を闡明せられてゐる。

それゆゑ二願から行信を見た場合と、行信を行信として見た場合とが自ら區別せられる。何となれば二願は主とし

て法の上にあつて、それは機と相對せられる。行信は本來絕對にして機法是一のものであるからである。故に行信對立するのはこれを十七十八の二願に繋ぐからであつて、三願轉入の立場から、十八願が信として機位に置かれ、行は十七願へと所信の位に分開せられたからである。隨ひて眞假の相對といふことも、衆生の機を對象とせる本願の上にあることであつて、『行卷』偈前に

凡就誓願有眞實行信亦有三方便行信

と言はれたのも、『眞佛土卷』(會七五三)に

然就願海有眞有假是以復就佛土有眞有假、由選擇本願之正因成就眞佛土

とあるのも、誓願に就き又は願海に就いて、眞實と方便とを分判せられてゐる。之に反して往相廻向は元より絕對的にして、往相廻向の内容には、眞實の教行信證あれど、方便の教行信證はない。それゆゑ往相廻向の内容たる教行信證にあつては、四法孰れも絕對的にして、その特質として能所不二機法是一の世界に置かれてゐる。これを本願に縁つて、方便の四法と對立せしめざる限りは、往相廻向としての四法は、之を相對的に考ふべきでない。四法の一々が眞實であると同時に絕對である。即ち眞實の教行信證は、本來これを四法として切り離すべきものでない。切り離さうとしても切り離されないのであつて、教の一つにも絕對の救濟があり、行にも信にも各々絕對の救濟がある。若は行若は信、一事として如來清淨願心の廻向成就せる所ならざるなく、若は因若は果、同じく如來清淨願心の廻向成就せる所であるゆゑ、教行信に絕對の救濟あるがやうに、證に絕對の救濟あることも勿論である。この四法悉く信の一念に廻向せられる所に、願成就せる一實圓滿の眞宗があるのであるから、絕對眞實の救濟といふ上からは、この四法を切

り離して相對的に考へるといふことが誤謬の由つて來る所ではあるまいか。だから教行信證の四法は、絶對的な往相廻向の内容として考察せらるべく、行信の二法またその本來な絶對的の位置において研究せられなくてはならない。故に予が且らく本願から切り離して行信義を考察するといふ方法も、此の意味の下に首肯せられるであらう。

四

斯く本願から切り離して見た行信の自體、即ち果上既成の行信から言へば、行信孰れも往相廻向の具體的表現であつて、行にも信にも救濟の絶對的價値が圓現せられる。されば『行卷』に謹按^{テスルニ}往相廻向^ヲ有^リ大行^ニ有^リ大信^ニと標して、往相廻向の内容たる行信に同じく絶對的な大の字を冠してゐるばかりか、『信卷』には更に謹按^{テスルニ}往相廻向^ヲ有^リ大信^ニと、大信のみを以て往相廻向の内容とせられてゐる。

故に他力往相の廻向にあつては、行に救濟の絶對的價値が圓現せられてゐると同じく、信にも亦救濟の絶對的價値が圓現せられてゐるのであつて、行が「圓融至徳之嘉號」であれば、信も亦「極速圓融之白道」と稱へられる。隨ひてその救濟具現の單位たる一念にあつても、『行卷』(會三一左)に

凡就^{ツテ}往相廻向^ヲ行^ニ行^ニ則有^リ一念^ニ、亦信有^リ一念^ニ

と標せられ、圓融至徳の行の一念が絶對的であると同じく、極速圓融の信の一念も亦絶對的である。即ち行信齊しく其一念の單位にあつて、救濟の絶對的具現であるといふことの外に、他力真宗に於ける救濟の眞實性といふことはないのである。

既に往還の二廻向は、眞假權實の相對的批判を超えた絶對の領域におかれる。その二廻向を大綱とせる『教行信證』

の組織にあつて、その開顯せる行信が、また絶對他力の眞實性にあることは言ふまでもない。之を『略本』から見て、行には則ち「利他圓滿、大行」といひ、信には則ち「利他深廣、信心」といふ、俱にこれ往相の内容たる大行大信にして、それが孰れも絶對的である限りは、二にして而も不二であると見なくてはならない。如何にしても絶對眞實といはれるものが二つ雙ぶべき道理はないから、『和讃』にも亦「無上寶珠の名號と眞實信心ひとつにて、無別道故とときたまふ」と、その一體無二に救濟の可能が顯示せられてゐる。

故に此の絶對行信の立場から見れば、『行卷』には行の絶對的救濟が開顯せられて、信は行に具せる内容に外ならず、即ち「往生之業念佛爲本」といひ、「本願名號正定業」といはるゝ行に救はれる宗教であるし、又『信卷』には信の絶對的救濟が開顯せられて、此の場合には行は信に具せる内容に外ならない。即ち「涅槃之城以信爲能入」といひ、「至心信樂願爲因」といはるゝ信に救はれる宗教となる。されば『行卷』には必ず行信と用語を次第し、『信卷』には必ず行信と用語を次第せるも、行信いづれも獨立せる絶對の立場を規定せるものと看做してよい。これ謂ゆる信具の行、行具の信と稱せられるものであつて、こゝに行信は能具所具の關係であると言ひ得られるとするも、兩者互に能具となり所具となるのであるから、その具體的内容として實は能所不二機法は一であると見なくてはならない。

五

然らば同じ絶對不二と稱せられるものが、如何にして行と信との二つに分たれるのであらうか。行とか信とかのいつでこそ絶對唯一と見らるべきに、何が故にそれが行信と對立せられ、行一念信一念と分裂するのであらうかといふに、それは恐らく同じ絶對が人と法との二つの立場から見られるからであらう。即ち約法絶對からいへば行であり、

約人絶對からいへば信である。これを『行卷』(會三三三)に、本願一乘の教體たる名號からは

然按^{ルニスルニ}本願一乘海^ヲ圓融満足極速無碍絶對之教也

といへるは、約法絶對と見るべく、又機に就いて要門自力の機と弘願他力の機とを對論して、

然按^{ルニスルニ}一乘海之機^ヲ金剛信心^ハ絶對不二之機也

とあるは、約機絶對である。我が真宗の本願一乘海に於ける絶對不二は、斯の如く約法約人の二に分たれてある。これを『愚禿鈔』上^六に於ける判釋から見ても

本願一乘頓極頓速圓融圓滿之教者、絶對不二之教一實真如之道也^(以上約)應^レ知^(以上約)。專中之專^{ナリ}頓中之頓^{ナリ}真中之真^{ナリ}圓

中之圓、一乘一實誓願海^{ナリ}第一希有之行也^(以上約)。金剛真心無碍信海^{ナリ}應^レ知^(以上約)。信絶對。

とあつて、一乘海絶對の徳を讚嘆するに、教行信の三面よりし、教に約しても絶對であり、行に約しても絶對であり、又信に約しても絶對であるといふ。その中に於いて教行の二は即ち約法絶對であり、信の一は約機絶對であること言ふまでもない。

斯くの如く唯一獨存すべき絶對不二の一乘海が、一は法に約して極速圓融の大誓願海と見られ、一は機に約して金剛の真心は無碍の信海なりと見られる所に、他力救濟の妙用が具現せるものと看做してよい。而して此の約法約機の絶對不二こそ即ち眞實の大行大信であつて、往相廻向の内容とせられてゐる。されば一實真如の絶對海がいつか相對化せられて行信二法と岐れ、機法能所と對立することとなつたけれど、而も行信相離れず、能所固より不二にして、機法永く一體たるところに、絶對他力の大道があるのである。

故に若し眞宗に於ける他力救濟の眞實性が認め得られるものとしたら、予輩はその本質を行信二法の上に置き、能所不二機法一體といへる絶對不二の體験を以てするに躊躇するものでない。而して彼の六字釋義より見れば、六字の名號こそ全く行信二法を内容とし、能所不二機法一體の妙旨を象徴せるものであつて、他力安心の體といふもたゞ此の六字の外に出でず、而も「南無阿彌陀佛の廻向の恩徳廣大不思議にて」と、是に由つて救濟の作用が實現せられるのである。

されば行信二法の關係は、飽くまで此の能所不二機法是一といへる絶對性の上に、他力救濟の眞實性が考察されなくてはならない。從來の行信論にあつて、動もすればたゞ能所に詳しくして不二を忘れ、専ら機法を論じて一體に疎きの感なき能はざるは、特に遺憾とすべきである。これを『教行信證』の體系から見ても、又『六要』の釋義や『御文』の教示から窺ふも、この能所不二機法一體の體験こそ、他力救濟の原理であると見るべく、六字の内容たる行信の絶對性を外にして、眞宗に於ける救濟の眞實性の高調せらるべきものはないのである。故に行信論の研究としても、若し他力救濟の眞實を基調とする限りは、行信の關係として、其相對差別よりは寧ろ絶對不二の闡明に留意せらるべきである。

一六

上來考察し來れる如く、既に他力救濟の眞實性を、行信二法の絶對不二に認めたとすれば、これに對して他の自力宗教の迷信的不眞實性を相對差別にありと認めるのが必然である。即ち眞宗の救濟が眞實であるのに對して、他の宗教が權假であり、邪僞であると見られるのは、その信仰の原理が相對差別におかれて、絶對他力の能所不二機法一體

10 といへる圓融性に背反するからであると推定しなくてはならない。

近くこれを『教行信證』に就いて檢するに、『行』信二卷に於ける眞實行信と、『化土卷』に於ける方便行信と、其相異せる所以は果して何れにあると見るべきか。それは勿論願に眞假あり、信に自力他力あるに由るのではあらうが、これを行信機法の上から見て、何が故に七十八願の行信と、十九二十二願の行信との間に、斯くも自他眞假の相異を生ずるのであらうか。こゝに其の相異の生ずる所以が闡明せられてこそ、自力救濟の方便權假たることの知られると同時に、他力救濟の眞實性が愈々明かに認められるであらう。

されば『化土卷』に於ける十九二十の救濟が、方便と見られる理由が何れにあるかといへば、それは行信差別して機法隔歴するからであつて、自力の自力たる所以は此に在りと看做してよい。機法既に隔歴して能所恒に相應せざれば、行信自ら差別してその圓融が期せられない。それゆゑ『化土卷』(會八二〇)に先づ『觀經』の隱顯を釋して

言顯者即顯定散諸善開三輩三心、然一善三福非報土眞因諸機三心自利各別而非利他一心、如來異方便忻慕淨土善根是此經之意即是顯義也

と、『觀經』に於ける顯說方便としては、其行にあつて定散諸善二善三福といふ差別行であり、其信にあつても亦諸機三心自利各別といへる差別信である。かくも行信俱に差別して隔歴不融なる所に、自力方便としての特質が存するのである。されば更に其方便行信の内容を開釋して

願者即是臨終現前之願也、行者即是修諸功德之善也、信者即是至心發願欲生之心也、依此願之行信顯開淨土之要門方便權假、從此要門出正助雜三行

と云ひ、具さに二種機、二種三心、二種往生とそれの差別相が列擧せられてゐる。それゆゑ方便の行信に於いては、行にあつて萬行諸善といひ、雜行雜善と稱せられ、信にあつて諸機各別定散自利之心と稱せられるもの、これが差別相對せる自力方便の相でなうて何であらうか。

他力の救濟にあつては、絶對不二を特質とすれば、純粹な一因一果にして、因も平等なれば果も亦平等であつて、有ゆる差別悉く撤廢せられたところに、本願一乘と稱せられる所以がある。之に反して方便自力の救濟にあつては、因の行信が千差萬別なるがやうに、果の淨土も亦千差萬別に階級づけられる。而して更に二十願意の開説せられた『阿彌陀經』にあつても

就^ナ眞門之方便^ニ有^リ善本^ニ有^リ德本^ニ、復有^リ定專心^ニ復有^リ散專心^ニ、復有^リ定散雜心^ニ、雜心者大小凡聖一切善惡各以^テ助正間雜心^ニ稱^ニ念名號^ヲ、良教者頓而根者漸機^{ナリ}行者專而心者間雜^ス、故曰^ク雜心^ニ也

と示され、二十願眞門の救濟にあつて、行は念佛一行と純化せられても、信は猶ほ定散雜心であるゆゑ、機法相對せられて、行信俱に未だ差別隔歴の咎を免れないのである。

斯くの如く、自力方便の宗教にあつては、行も信も相對差別せられるから、從ひて能所相隔て、不二ならず、機法亦互に扞格して一體でない、故に如何ほど修行に勵精するも、到底佛願に相應せず、行も如實ならず信も淳一ならず、若存若亡して持續しないから、眞の安心と平和との獲られるものでない。されば行に救はれんとして行に迷ひ、信に救はれんとして信に惑ひ、滔々たる天下、徒に救ひの道に苦み惱んでゐるから、之に對して眞實の行信を開顯して、絶對眞實の救濟に徹底せしめんとせられたのが、祖聖親鸞の宗教である。

而して此の救濟の眞假はまた漸頓の二つで批判せられた。純粹他力の行信にあつては、行信孰れも絶對不二にして機法一體なれば、本質的に行と信とは對立しない。之に反して方便權假の行信にあつては、行信相離れて對立すれば、常に行を以て信を深め、信によつて行を高めやうとする。彼の大乗佛教にあつて修行の階級に應じ、幾度か發心して修行の内容が深化せられると言へる如く、行も信も次第に漸々高められ深められるところに、救濟の意義を感ずるといふのが即ち謂ゆる漸教である。これ恐らく一般宗教に於ける道德的修養として重視せらるゝ所であらうけれど、横超の直道たる絶對他力にあつては、之を貶めて自力漸教の特徴とする。即ち『愚禿鈔』上九に

一乘圓滿機他力^{ナリ}

漸教廻心機自力^{ナリ}

と批判せられて、たゞ往相の一念發起せられた時、救濟の業事直に完了せられるが圓頓一乘の宗致である。謂ゆる一念往生便同彌勒と稱せられ、頓極頓速、圓中之圓頓中之頓と呼ばれる所に、絶對他力の妙處が見られる。決して世間の常識的宗教の規矩に當て嵌めて批判せらるべきものでない。

されば眞實の救濟が、たゞ能所不二機法は一の絶對境にのみ達成せらるゝことの闡明が、行信論研究の目標でなくてはならない。既に行信二卷と分開せられ、十八願の行が十七願へと展開せるは、三願轉入の體驗より十九二十の願に相對せられたからであつた。然るに十九二十の方便願では、行信差別して機法對立せるが故に、『化卷』(會八^{二六}右)に引かれる『玄義分』の

其要門者即此觀經定散二門是也、定即息慮以凝心、散即廢惡以修善、廻此二行一求願往生也

といふ如き廻向求願の祈禱の迷信に墮し、『同』(會八二八)に引かれた『序分義』如是釋の、機教相對して其相應一致を期待し、又教益相對して隨心起行得益不同を考査する如き、修道の悩みに行き當らざるを得ないのである。縦ひ萬善諸行の相對善を離れて、念佛一行の絕對善に歸しても、猶ほ自力迷心を脱せざれば、『同』九三四に

凡大小聖人一切善人、以本願嘉號爲善根、故不能生信、不了佛智、

とあるやうに、未だ行信隔歴して、機法一體の絕對處に到達せざれば、名號の絕對法を相對的に己が外の客觀に置いて、之を自己の善根とし所有せんとするから、悩ましき聖人や憐むべき善人とならざるを得ないのである。されば行信差別して絕對不二ならざるところ、そこに即ち漸教の漸教たる所以があるのであつて、これに反せる行信一如の頓斷頓證の救濟こそ、他力眞實の宗教であると看做される。『愚禿鈔』及び『信卷』に出づる漸頓橫豎二雙四重の教判は、斯る批判の下に他力眞宗の眞實性が開顯されたものである。

以上考察を進め來れる如く、行信の眞假といふことは、その絕對圓融と相對差別とによつて、またその頓極頓速と漸々修學とによつて批判せらるべく、隨ひて他力救濟の眞實性といふことも、能所不二機法一體といへる絕對的一念にありと見なくてはならない。而して行信二法の關係は、それが同じ絕對に於ける約法約機の分化兩面に外ならざれば、機法固より一體にして、能所全く不二であるに相違ないが、然らばその眞實救濟の體驗が如何に意識されるかといふに、若し一往これを配當すれば、約法絶體の體驗は機法一體の六字として領解せられるものであり、また約機絶體の體驗は佛心凡心一體の心境として内省せられるものであるとも言ひ得られるであらう。

而も此眞實の行信本より本願と離れず、之を十七十八二願に繋いで、その關係は更に詳しく攷査せられねばならぬこと勿論である。されど今は單に行信を行信として取り扱つたのに過ぎないが、爾らば其意味の行信に對して如何な關係が規定さるべきかといふに、若し行信その物の他方救濟の具體的表現よりすれば、行と信とは能具所具の關係に外ならない。即ち『行卷』に之を行信と熟する邊よりは、行は能具であり信は所具である。又『信卷』に信行と熟する邊からは、信は能具であり行は所具である。斯く約法と約人とにより行信の能所が互に轉換すれど、本來能所不二にして、同一絶對たることが失はれない。而もこの行信に於ける能具所具の見方は、『教行信證』の組織體系にあつて、これを前より後へと順觀せる絶對的開顯の立場である。若も『教行信證』を後より前へと逆觀せる相對的批判の立場から見れば、行信の關係が所信と能信との心境對立の關係に轉換することも、また肯定せられるであらう。たゞ行信が所信能信の關係として見られるとしても、眞實の行信にあつてはそれが本來能所不二にして、たゞ方便行信の能所相對せるより、眞實の行信にあつては、それが能所不二の絶對相たるを知らしむるに外ならぬことを忘れてはならぬ。斯く他方の行信がこれを能具所具と見るも、能所互に轉換して其絶對圓融の妙處が已證せられ、これを所信能信として考ふるも、能所不二にして却つて其絶對頓速の幽趣が窺知せられて、他方救濟の眞實性の開顯せられる所に、眞實行信の旨趣があると言つてよい。(昭和一一、五、二三稿)